

北沢幸浩様 (1960年電気通信学科卒) に寄稿していただいた随想の第2話です。

「銚子 TV 中継局建設の思い出」

第1話での新島 TV 局の後、電界強度測定のために三宅島に渡り、測定が終わってから新島に帰ろうとしていましたが、丁度台風が来て海が荒れ、東海汽船の船は来ません。1週間余りで東京への直行便に乗ることが出来ました。我が荷物は新島に置いたまま台風後の荒れた海を船底で船酔いに苦しみながら、竹芝栈橋に上陸出来ました。所が其処に古河電工の車が待機しており、すぐに銚子局建設現場に直行です。



銚子 TV 中継局は、写真のように鉄塔を NHK と東京民放 5 社で共用し、アンテナは別々で 2 本腕を上げて持っているような形状をしております。この形状をろうそくに見立ててキャンドラブラーと呼んでいますが、以後 NHK と民放 5 社との共同建設の先駆けとなった歴史的なアンテナです。鉄塔を共用できるのは大変有利ですが、それぞれのアンテナが近いためにお互いに電波が干渉するため、ある程度の距離 (6m 程) を保って建てられています。以後民放 5 社との共同建設は前橋、秩父 TV 中継局など大きな局の建設が続きます。

テレビ電波は空間波ですので、見通しの良いことが必要であり、通常、近くの小高い山などに送信所が建設されますが、銚子 TV は近くに適当な山がなく、60m の高い鉄塔を立ててサービスしています。銚子局の検査は大変で 60m 鉄塔を登り、45 度位の鉄橋を這って渡り、やっとの思いでアンテナに辿り着きました。船酔いが覚める暇なく地上 70m 程の天空で工事長とただ 2 人アンテナの検査点検をした思い出があります。(第 2 話完)